腕時計

咲蘭保

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
腕時計

【Ｎコード】
Ｎ３５７２Ｙ

【作者名】
咲蘭保

【あらすじ】
大切な姉を失った宮野志保。
そんな志保を守る工藤新一。
砂時計の話を名探偵コナンの新志風にした作品です。
新一と志保の切ない恋愛を書いています。

始めに（前書き）

名探偵コナンと砂時計のコラボ作品。
砂時計の登場人物に名探偵コナンの登場人物を当てはめてみました。
カップリングは主に新志です。
※快志もあり。

始めに

設定

植草杏＝宮野志保

北村大悟＝工藤新一

月島藤＝黒羽快斗

月島椎香＝毛利蘭（砂時計の原作では藤と椎香は兄妹ですが快斗と蘭は親友です。）

杏の母親＝宮野明美

杏の祖母＝阿笠博士

楢崎歩＝前本茜〔オリキャラ〕

月島茉莉子＝中森青子

友達Ａ＝鈴木園子

・コミックをもとにして書くので台詞が多くなると思います。

・砂時計をもとにしていますが、登場人物の性格はほとんど名探偵コナンのままです。

・無理やりな設定もあると思います。

以上の条件でも読んでみたいという方は１話から読んで見てください。

1話：19歳夏・神鳴

『俺が守ってやっから。』
組織を潰して一年半。宮野志保19歳、夏。

私と工藤くんは組織と決着がついたあと、完成した解毒剤を飲み、元の姿に戻った。
その後、私は転校生として帝丹高校へ通うことになった。
転校初日に私は蘭さんに声をかけられ、友達になった。
工藤くんは元に戻ってから、蘭さんに告白することもなく、以前と同じように《幼馴染》の関係を続けていた。
二人は以前から恋人、などと噂されていたらしいが
今ではそんな話を全くと言っていいほど聞かない。
私の知らない間に何かあったのだろうか、とも考えたが
二人の関係に私が口出しするのもよくない、と思い
私は何も聞かなかった。

志保「ねぇ、工藤くんいる？」

そう言って、私が声をかけたのはサッカー部のマネージャー前本茜だ。
工藤くんは復帰しても部活には入らなかったが、たまにサッカー部に顔を出す。
今日も朝から朝練に参加している。
こうして、工藤くんが朝から練習に参加するときは私が彼の分の弁当を作って持ってくる。

茜「今、練習中よ。弁当なら私が渡しておくから。」

蘭さんと工藤くんの噂がなくなってから工藤くんにアピールする女子が増えだした。
どうやら彼女もそのうちの一人らしい。

志保「じゃぁ、よろしくね。」

前本さんは私から大きな弁当箱を受け取り、笑顔で工藤くんにそれを持って行く。

志保（・・・はぁ。）

思わずため息をついてしまった。
そして、体をくるり、と回転させグラウンドを出ようとした。
そのときおーい、と少し離れたところから声がした。工藤くんだ。
彼は走って私のところに向かってきた。

新一「志保、弁当サンキュー。」
志保「別に。私の弁当のついでだから。じゃぁね。」

私は工藤くんに背を向けた。
すると、腕をギュっと掴まれ、彼と向かい合った。

新一「あのさ」

彼は元の姿に戻り、手足にしっかりとした筋肉がついている。
手もゴツゴツとしていて
小学生だったころより、男らしさが出ている。

新一「聞いてるか？」

志保「え？」

新一「これ・・・。修学旅行の話だけど自由時間、蘭や快斗たちと一緒に回らねーか？」

志保「考えとくわ。それじゃ。」

私はそっけなく返事をし、再び工藤くんに背中を向ける。そして、私が歩き始めたとき、次は肩をつかまれた。私は思わず肩に置かれた手を払いのけてしまった。

新一（にゃろ。）

「俺、今日も目暮警部に呼び出し受けてるから蘭たちと勝手にコース決めといてくれ。」

志保「はいはい。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「「「うわー」」」

「山だ」「山ばっかりだ」「高校生にもなって修学旅行が山なんてな」

クラスの男子たちは愚痴をこぼしている。

新一「ったく、これじゃぁ修学旅行ってよりキャンプじゃねーか。

今日だってテント張って寝るんだろ？」
志保「今更、何文句言ってるのよ。あなただってこういうの好きじゃない。
小学生のころは探偵団の中であなたもそれなりに楽しそうだったわよ。」
新一「うるせー。」

こうして二人並んで小声で話すのは小学生の頃と変わらない。
でも、この光景を遠くから睨んでいる人もいる。
私はその視線に気づいて自然と工藤くんから離れていく。

志保（はぁ、面倒だわ。）
蘭「志保ちゃーん、テント建てるよー。」

十五分ほどしてテントは建て終わった。

蘭「やっと終わったね。」
園子「でも、雨降りそうじゃない？」
志保「あ・・・降ってきたわ。」

最初はポツ、ポツと降っていた雨も次第に大雨になっていた。

遠くで、「テント片付けろー！キャビンに集合！」という先生の声が聞こえる。

園子「今、テント建てたばかりなのに。」
志保「仕方ないわね。」

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――

『雨と雷がひどいので安全のため今夜は全員キャビンで寝ることになりました。
　順番にシャワーをあびて今夜はゆっくり休んでください。』

カッ！！ガラガラ

「うおっ」
「みっ見たか、今の！落ちたんじゃねーか？」

快斗（はぁ、うるさい・・・寝られねーし。）

俺は一人、部屋を出た。

快斗（ん？あれは・・・）「志保？」

窓の外を見ている志保を見つけた。

志保「黒羽くん。どうしたの？」
快斗「いやー雷がうるさいし、へやのやつらもうるさいしで眠れなくて。」
志保「黒羽くんって雷苦手？」
快斗「苦手・・・なのかな。俺の親父が死んだ日、雷がすごくてさ。
　　それから雷がなるとよくそのときのこと思い出すんだ。
」
志保「そう。」
快斗「・・・知ってる？雷って元々は『神が鳴く』って書くんだぜ。

昔は『神様の仕業』って考えられていたらしい。」

志保「神様ねぇ。」

昔、まだお姉ちゃんが生きてた頃、私は神様にお願いしたことがあった。

『お姉ちゃんを助けてください』『私を組織から助けてください』って。

志保（神様・・・）

そこで快斗があ、と声を漏らす。

快斗「やんできた。風も弱くなってきたな。・・・これなら行けるかな。」

志保「え？」

私は黒羽くんの後ろをついて行った。

靴を履いて外に出る。

先生達に見つからないよう静かに。

こういうところでは昔の経験が役に立つ。

黒羽くんは怪盗キッドの、私は組織だったときの・・・。

志保「ちょっと？どこ行くのよ。」

快斗「前にここに来た時見つけたんだ。今年は見れるか不安だったけどよかった。」

快斗につれてこられたところには小さな光がたくさん散らばっていた。

志保「蛍・・・。私、初めて見たわ。綺麗ね。」

快斗「だろ？」

黒羽くんはニッ、と笑った。

快斗「それより、今日はあの腕時計してないんだな。」
志保「え？」
快斗「ほら、お姉さんの形見の。いつもつけてんのに今はつけてないから。」

私の大切な腕時計・・・。
あれは私と工藤くんがまだ小学生の姿で出会って間もないころ、
工藤くんが私に渡してくれた。
『明美さんが亡くなったときにつけてた腕時計だ』って言って。
けど、私はいらない、って言った。
お姉ちゃんのことを思い出したら泣きそうになるから。
なのに彼は『大事に思ってた人だろ？大事に思ってた人のこと、無理に忘れようとするな。
大事に想ってた気持ちを消そうとするんじゃねぇ。・・・俺が守ってやっから。』
そう言って渡してくれたあの腕時計。
あれから私は常につけていた。
今日は雨に濡れて壊れないようにカバンの中に入れた。

志保「カバンの中にあるわ。」
快斗「そう。それじゃぁ、そろそろ戻ろうか。先生に怒られるのも嫌だし。」

そして私達はキャビンへ帰っていった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーー

志保（え？ない・・・たしかにココに入れたはずなのに）

私が帰ってきたとき部屋の中はまだ騒がしかった。
私は外から帰ってきてすぐにカバンの中を探した。
カバンの中身も全て出して探してみたが見当たらない。
そのとき、後ろから声をかけられた。
「宮野さんが探してるのってあの傷だらけの腕時計？」
振り返ると茜が軽く笑みを浮かべて立っていた。

志保「そうだけど、あなたどこにあるか知ってるの？」
茜「うん。知ってる。クスッ。」
志保「どこにあるの？」
茜「確か、あのテントを建てた辺りだったかな。落ちてたから大きな石の上に置いたわよ。」
志保「そう。」

私はそれだけ聞くと急いで外に飛び出した。
外は再び大雨で、遠くでは雷も鳴っている。
でも、今の私にそんなことどうでもよかった。
あのときの茜の意味ありげな表情も気にしなかった。
とにかく腕時計を見つけるためだけに走った。

茜が言っていた場所に着いた。
しかし、腕時計は見つからない。

志保（ない・・・どこにあるのよ・・・）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

そのころキャビンでは蘭と園子から志保がいなくなった、と聞いた
新一と快斗が捜索を始めていた。
新一「蘭！志保はいついなくなったんだ？」
蘭「４０分くらい前。部屋の前の廊下で見たよ。　トイレに行った
と思ってたんだけど
　　なかなか帰ってこないから、心配で・・・」
快斗「キャビンの中探してみたけどいなかったぜ。」
園子「女子トイレも全部探したけど・・・」
新一「となると、外か？」
蘭「でも、外ってこんなに雨が降ってるのに。
　こんな中歩いたら危険だよ！」

そのとき、新一は妙な動きをする人物を見た。
青ざめた表情で窓の外をチラチラと見ている。
新一はその女の傍に行った。

新一「おい、おめー何か知ってんのか？」

すると女はフルフルッと首を横に振る。

園子「そういえば、前本さん志保ちゃんと二人で何か話してたわよ
ね？」
新一「本当に何も知らねーのかよ！」
茜「と・・・時計・・・」
新一「あん？」

茜「腕時計を探しに行ったの。宮野さんは。」
新一「腕時計って、もしかして・・・」
快斗「お姉さんのじゃねーの。カバンに入れてるって言ってたけど、
さっきつけてなかったし。」

そこで茜はごめんなさい、と言って腕時計を出した。

新一「なんでオメーがこれを持ってんだ？」
茜「ち・・・違うの！！ちょっとからかおうと思っただけ・・・！
あきらめて帰って来たらちゃんと返すつもりで・・・！」
新一「何でオメーが持ってるのかを聞いてんだ！！」

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――

志保（頭がクラクラする・・・）

もう限界だった。いくら夏とはいえ、雨に1時間以上も打たれ続けていたら体も冷える。

「志保！！」

「志保！！」

どこかで声がするが辺りが暗くて何も見えない。

志保「工藤くん・・・」

志保の目に声の主が映ったときにはその人物は志保を抱きしめていた。

新一「大丈夫か？」
志保「なんとかね・・・。」
新一「オメー体冷えすぎだろ。」
志保「仕方ないでしょ。」

そう言った後、志保の体はぐらついた。
そんな志保の体を新一は抱きかかえ、キャビンに戻った。

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――

茜「宮野さん！ご・・・っ　ごめんなさい・・・っ」

目が覚めると前本さんがいて、腕時計を返してくれた。
私は前本さんからそれを受け取ってその時計をギュッ、と握りしめた。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――

ガタンゴトン、ガタンゴトン・・・

ドサッ

志保「？そこ、蘭さんと園子さんの席なんだけど。」
新一「席かわってもらった。」
志保「・・・そう。」
新一・志保「「・・・」」
新一「なぁ、俺なんかしたか？」
志保「はぁ？」
新一「お前ここんとこずっと超感じ悪かったし・・・いつもに増して。
目を合わせてもすぐそらすし、ちょっと触れただけで人をバイキンみたいに。」
志保「はぁ・・・あなたほんと鈍感ね。女子がそんなことするのって意識してるから、とか考えないの？」
新一「意識してたのか？」
志保「さぁね。今のは普通の女の子の場合。私の場合はどうかしらね。」
新一「オメーも普通の女子だろ。」
志保「自意識過剰。」
新一「でも、俺はずっと前からお前のこと意識してるんだぜ。
志保もそうとうな鈍感だな。」
志保「意味がわからないわ。」
新一「そうだな。簡単に言うと、俺はお前が好き、ってことかな。」
志保「何言ってるのよ。ふざけないでくれる？」
新一「ふざけてねーよ。俺の本当の気持ち。
俺は志保が俺のことどう思ってるか聞きたい。」
志保「・・・私は・・・」

想い出はいつもまぶしくて痛みと切なさを伴う１９歳夏

初めてのキス

1話：19歳夏・神鳴（後書き）

砂時計1巻の後半の部分からのお話です。
台詞は新志風に改造してます。

2話：19歳秋・誰そ彼

――ずっと、ずっとずっとあなたのそばにいたい――
それだけが願いのはずだった。

別れは突然やってくる。

志保「・・・えっ、イギリス？」
快斗「そう。世界を飛び回って親父みたいなマジシャンになるんだ。
　　最初はイギリスで修行！」
志保「そう・・・。」

黒羽くんがいなくなる。
組織を抜けてから、何度か私や工藤くんを助けてくれた。
組織との戦いのときもあの白い怪盗の姿で一緒に戦ってくれた。
黒羽くんがいてくれたから私たちは今も生きていられる。

――――――――――――――――――――――――――――
――――――――

新一「あぁ、快斗のこと？イギリスに行くって言ってたな。俺も昨日聞いた。」
志保「ほんと、黒羽くんの言うことはいつも急よね・・・」
新一「ま、でも仕方ねーよ。親父さんの仇を討って、やっと自分の夢を叶えようとしてんだ。
　　いつまでも組織のことばかり気にしてられねーよ。」
志保「そうね。黒羽くんには感謝しないといけないわね。」

時間はゆっくりと、けれど確実に私達の関係を変えてゆく
このまま時間をくい止めたい。それでも変化は突然訪れる

志保「ただいま、博士。」
博士「お帰り、二人とも。そうじゃ、志保くん。お客さんがみえておるぞ。」
志保・新一「「お客さん？」」

靴を脱ぎ、阿笠邸のリビングに三人並んで入っていく。
リビングに入った先で工藤くんと私の目に入ったのは
私と同じような色の髪の老婦だった。
手にしていたマグカップを机に置き、こちらを見る。

新一「あの・・・」
志保「お、ばぁちゃん・・・」
新一「え？おばぁちゃん？」

老婦「志保。久しぶりね。」

私は覚えていた。
この声、この笑顔、この優しい雰囲気。
私が大好きだった祖母だ。

志保「おばぁちゃん・・・よね？」

私がそう問うと何も言わずに優しく微笑んだ。

この表情はどこか私のお母さんに似ていた。

老婦「大きくなったわね。」

おばあちゃんはそう言って私の頭をなでてくれた。
こうやってなでてくれるこの手も、私は大好きだった。

両親がまだ生きていたころ、私とお姉ちゃんはよくおばあちゃんの家に行っていた。
だけど、私が組織に入れられておばあちゃんと会う機会はなくなった。
両親もお姉ちゃんも、おばあちゃんの話はしなくなった。
それから、両親が死に、組織が人を殺している場面もよく見るようになった。
そして、思った。おばあちゃんも死んだんだ、と。

でも、今、ずっと死んだと思っていたおばあちゃんが私の頭をなでている。

志保「おばぁちゃん・・・」
老婦「よかったわ。また会えて。」

そこに、ずっと私の横に立ってこの様子を見ていた工藤君が疑問を口にした。

新一「あの、あなたは・・・」

すると、おばあちゃんは私の頭から手を離し、先ほど座っていたソファに腰をおろした。
工藤くんと私もそれに続く。

「私は志保の祖母のマリーと言います。
　何日か前にＦＢＩの方たちが私の家に来て、志保のことを聞きました。
　そして、一目志保を見たくてこうして来たのです。」
おばあちゃんは英語で言った。
英語の分からない博士には工藤くんが通訳している。
ＦＢＩが家に来て私のことを聞いたなら組織のことも知っているだろう。
お父さんやお母さん、お姉ちゃんが死んだことも。
まさか、おばあちゃんに会えるとは思いもしなかった。
まして、血の繋がった家族がこの世にいたなんて考えもしなかった。
その後もいろいろと話をし、おばあちゃんは３日ほど阿笠邸に滞在することになった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーー

キーンコーン♪
園子「きゃーっ！！下がった！下がった！！この時期に！！最悪！！」
蘭「私も・・・」
「次！宮野！！お前全国で一位だったぞ。」

「「「おおーーーー！！」」」

新一「クソ！また志保に負けた・・・。」
志保「あなた何位？」
新一「・・・二位。快斗は？」
快斗「四位・・・」
志保「三位は服部くんかしらね。」
新一・快斗「だろうな。」

「なんなんだ・・・あそこの空間は。」
「ここの学校って全国の上位者が集まるほど偏差値高かったっけ？」
「いや・・・あいつらは特別だよ。」

私達はクラスでそう言われていることに全く気づかなかった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーー

志保「おばぁちゃんは、寂しかったのかしら。」
新一「ん？」

学校からの帰り道。私は工藤くんと二人で帰っていた。

志保「おばぁちゃんは、おじぃちゃんが死んで、お父さん、お母さん、お姉ちゃんが死んで
　　ずっと、一人で寂しかったのかしら。」
新一「迷ってんのか？おばあさんとイギリスで暮らすかどうか。」
志保「迷ってないわ。私は工藤くんと一緒にいたい。」

本当に本気でそう思うのに

新一「俺は離れてても気持ちは変わることなんてないから。
それにどうしても会いたい時は会いにいける。
・・・志保が後悔しないように、ちゃんと考えろ。」

志保「工藤くん・・・私、工藤くんと一緒にいたい。ずっとずっと。
でも・・・・・・。」

新一「いいよ。俺はいつまででも待つから。・・・いや、いつまででもは無理だな。
待つのは俺が一人で稼いで、生活していけるようになるまでだな。
それを過ぎたら俺が迎えに行く。
だから、オメーは安心して行って来い。」

志保「わかったわ。私、イギリスに行ってくる。」

「博士、おばぁちゃん。私、・・・」

『工藤くんが迎えにきてくれるまで』
そう心に決めて、私はおばぁちゃんとイギリスで暮らすことにした。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーー

蘭「えーーーー！！！どうして！？どうして志保ちゃんも行くの？」
園子「快斗くんのせいよ！！」
快斗「なんでだよ。」
志保「まさか、こうなるなんてね・・・」
快斗「志保、新一は？なんて？」
志保「なにも。・・・大丈夫よ。」

永遠の別れじゃない。気持ちが離れるわけじゃない。

博士「志保くん、元気でな。無理はするんじゃないぞ。」
志保「わかってるわよ。人のこと心配する前にまずは自分の心配をしてほしいわ。」

ーーー

志保「工藤くん、私ちゃんと帰ってくるわ。だから・・・」

そのとたん、私の体は工藤くんの体に包まれた。

志保「ちょ、ちょっと皆見てるわよ。」

新一「別にいいんだよ。」

志保「じゃぁ、工藤くん。行ってきます。」

私はできるだけ笑顔でそう言った。

そして、唇が重なった。

新一「いってらっしゃい。」

”誰そ彼”が愛しい人をさらってく１９歳　秋

2話：19歳秋・誰そ彼（後書き）

マリーって・・・
自分で考えておきながら納得いきません。
でも、外人さんの名前ってわかりません・・・

３話：２０歳春・桜（前書き）

日本とイギリスって、季節違う・・・
でも、面倒くさいのでイギリスも日本と同じ季節ということで。

それと、私英語のことはよく・・・というより全く分からないので
外人さんも日本語しゃべってます。
実際には英語をしゃべってると思ってください。

3話：20歳春・桜

工藤くん、元気にしてますか？
日本を離れて半年が過ぎました。
私は無事にイギリスの製薬会社に入社しました。
でも・・・

「宮野志保ってあなたのこと？」
志保「えぇ、そうだけど・・・」
「よかったー、同年代の子がいて。あっ！私リマ！！よろしくねー。」
志保「よろしく。」
（なんか、園子さんみたい・・・）

とりあえず私は元気です。

志保「えぇ、同じ会社の人で、園子さんみたいな人がいるのよ。
最初ははっきり言ってあの人と一緒に仕事なんてできるわけないって思ったけど
知識に関しては以外と凄いのよね。
仕事もちゃんとするし。新しい薬の開発も順調なのよ。」
新一「・・・お前・・・俺がいなくても元気だな・・・」
（いつもよりよく話すし・・・）

18歳の春、あの薬を飲んで組織を抜け出して
工藤くんと子供の姿で出会った。そして元の姿に戻り、恋をして。
今はいわゆる《遠距離恋愛》というやつで・・・

志保「久しぶりね」
新一「ん？」
志保「電話。」
新一「あぁ、ちょっとある事件に手こずっててよ。やっと今日解決したんだ。」
志保「・・・腕落ちたんじゃない？」
新一「バーロー。んなわけねーだろ。
今回の事件は犯人が複数いて大変だったんだよ。
あーそれと、オメェもうすぐ誕生日だろ。なんか欲しいもんあるか？
買って送る。俺、よくわかんねーし。」
志保「別に何もいらないわよ。」
新一「遠慮すんな。あっ、でも常識の範囲でな？」
志保「じゃぁ、考えとくわ。」

もうすぐ私は２０歳になる。

志保（欲しいもの・・・《フサエブランド》の新作のバッグ？《プラダ》の洋服？）
「はぁ・・・」

でも本当は・・・

本当はプレゼントなんていらない

会いたい。

ーーー

た。

快斗「志保？」
志保「久しぶりね。」
快斗「だね。でもどうした？こんなところで。」
志保「黒羽くん、友達にアランっていう友達・・・」
「かーいーとー♪」

黒羽くんのもとに誰かが走ってやってくる。

快斗「おーアラン！」
リマ「！！／／／／／」
志保（なるほどね・・・）
快斗「で？志保、こいつがアランだけど・・・こいつに何か用か？」

黒羽くんがアランくんの服の袖を引っ張る。
本人は何がなんだかわからない、といった表情をしている。

志保「用があるのは私じゃなくて、この子・・・」
リマ「あの！！今度の土曜、志保の家で志保の誕生会やるんです！！
　　来て下さい！！お友達も一緒に！！」
快斗（お友達？）
志保（また勝手に・・・）

ーーー

快斗「・・・そっか、誕生日だっけ。何か欲しいものある？」
志保「何もいらないわよ。手ぶらで来て。それじゃぁ、私こっちだから。」

何もいらない。会いたい。

ーーー

リマ・快斗・アラン「「「「ＨＡＰＰＹ　ＢＩＲＴＨＤＡＹ！！」」」」
志保「・・・。」
リマ「あれ？無反応？おーーーい。」
志保「え、あっ、ありがとう。」
快斗「・・・・。」
リマ「ケーキ買ってきたんだよ！！みんなで食べ・・・
　　どうしたの、志保？」

リマが私の顔を心配そうにのぞきこんでいる。
それもそのはず、私の目から涙が流れているからだ。

リマ「ごめんね、志保。びっくりさせすぎた？」

リマは勘違いしているようだ。リマは何も悪くない。むしろ感謝している。
私はただ、思い出しただけだ。あのときの３人のことを。

「「「「ＨＡＰＰＹ　ＢＩＲＴＨＤＡＹ！！哀ちゃん！！（灰原さん！）（灰原！）」」」」

私が灰原哀だったとき、少年探偵団の３人がいきなり博士の家に来た。
あの日、工藤くんだけは風邪をひいて、探偵事務所で寝かされていて来なかった。
今の状況があの日にそっくりで、工藤くんはいない、と思い知らされた。

志保「ちょっと、昔を思い出しただけ。」

ＲＲＲＲＲＲＲＲ・・・・・ＲＲＲＲＲＲＲ・・・・

そのとき、テーブルの上に置かれた志保の携帯が鳴った。
画面を見てみるとそこには工藤新一、の文字。

志保「工藤くん？」
新一「誕生日おめでとう。わりぃ、直接言えなくて。」
志保「別に。」
新一「なんだよ。つめてーな。まぁいいや。
とりあえず今から飛行機でイギリス行くから。」

志保「え？」
新一「プレゼントの代わりだよ。明日の朝一でそっちの空港に着くから。
じゃーな。明日！！」

プッ・・・

ツーツー

志保（明日・・・）

会える。

――

快斗ＳＩＤＥ

新一と志保が離れて暮らすようになって半年。

今日はマジシャン仲間のアランと、アランに惚れているとかいうリマって子と
志保を楽しませるような誕生会をする

・・・つもりだったが、志保はいきなり泣き出した。
最初はうれし泣きかとも思ったけど違った。
『昔を思い出した』
昔っていうのは灰原哀のころか、灰原哀になる前の宮野志保のころのことだろう。

そこで、俺とアランはマジックでもして喜ばせようか、と考えた。
そのときアイツから電話がかかってきた。

『工藤くん？』

新一のことは別に嫌いじゃない。大切な友達であり、大切なライバルだ。
だけど、新一と話す志保の顔を見てると辛くなる。

さっきまで泣いていたのに、新一の声を聞いた途端、志保の涙は止まった。
なんだか、イライラする。
せっかく志保のために買ったプレゼントも今日は渡せそうにない。

そう思って、俺は小さな長方形の箱をポケットにしまった。

ーーー

まだ工藤くんは来てない。
私はなぜか落ち着かなくて携帯に表示される時間を見たり、キョロキョロとあちこちと見回したりしていた。

工藤くんと出掛けるといつも事件を呼び込んでいた。
もしかしたら今日も彼の周りで事件があっているかもしれない。
そんなことを考えていると、自分の名前が呼ばれた。

「志保？」

志保（ドキッ）

新一「よっ！久しぶりだな。」
志保「久しぶり。元気そうね。」
新一「あぁ、何？心配だった？」
志保「別に。ただ解毒剤の副作用とか出てないかなって。
それより何処行く？」
新一「んー、志保に任せる。俺、イギリスっていったらロンドンに行ったことがあるぐれーで
他はあまり知らねーんだよな。」
志保「じゃぁ、とりあえず近くの公園に行く？」
新一「おっ、いいな！」

ーーー

楽しい想い出がたくさんあるのよ。
実は、工藤くんがこっちに来たら一度は一緒に来たいと思ってたからよかっ・・・」

工藤くんは私の言葉を遮り、私の唇を工藤くんの唇が塞いだ。

志保「ちょっ、ちょっと！」
新一「・・・言っていい？」

「会いたかった。」

そう言うと、工藤くんは再び唇を重ねた。

ーーー

志保「えぇ、楽しかったわ。8月のお盆には帰るわ。」
新一「おう。待ってる。」

工藤くんは日本に向かって飛びだって行った。

ーーー

ーズがたくさんついたものが出てきた。

志保「コーム？綺麗ね。ありがとう。」

快斗「つけてみてよ。」

志保「そうね。」

私は黒羽くんに言われたとおりそのコームをつけてみた。

志保「どう？」

快斗「いいじゃん。」

志保「そう。本当にありが・・・」

その瞬間私の頭は黒羽くんの手で支えられ、唇を塞がれた。

快斗「おやすみ。」

静かな静かな春の夜のことでした

３話：２０歳春・桜（後書き）

快斗くん一人称を入れてみました。
志保以外の人物の一人称の場合は～ＳＩＤＥと表示することにします。
この話は基本的に志保ちゃんの一人称なので
志保ちゃんの場合は表示しません。

４話：２０歳夏・月の家（前書き）

軽くＲ１５？ありです。

4話：20歳夏・月の家

リマ「ねぇ、志保。夏は日本に帰るの？」
志保「えぇ。約束してるから。」
リマ「快斗も？」
志保「さぁ、私は何も。」

黒羽君は組織のアジトに乗り込んだとき
一緒に戦った大事な友人で

それなのに

あんなキス

笑い話にもならない。

ーーー

私は飛行機に乗った。
窓の外を見るといつの間にか飛行機は雲の上だった。
目をつぶると思い出す。
あの日のこと。

不意打ちだったとはいえ、工藤君にどんな顔して会えばいいんだろう。

目を開けると、いつの間にか日本に着いていた。
どれだけの間眠っていたのだろう。
凄く長い間のような気がする。

飛行機を降りると、私の目にずっと会いたかった工藤くんが映った。

新一「おかえり。」
志保「ただいま。」

工藤くんは私に笑いかける。
でも、そんな笑顔、私にはつらいだけ。
イギリスでのことを何も知らない工藤君に罪悪感しか残らない。
付き合ったばかりの頃、私とジンが男と女の関係だったと工藤君が知ったとき、
彼は凄く怒った。私に怒ったのではなく、ジンに。そして自分に。
私はそこに愛なんてなかった、と言ったけどそんな言葉が通用するわけもなく
無理やり私の唇を奪った。
そして私は見てしまった。
工藤くんの悲しい目を。
そのときから私は工藤くんにあんな顔を二度とさせないようにしようと心に決めた。

だからあのことは忘れる。
なのに、なんで・・・・

志保「黒羽、くん・・・」
新一「あっ、マジかよ。アイツも帰って来てんのか。」

私と工藤くんが見たのは博士の家に入ろうとする黒羽くんだった。
黒羽くんも私達に気づいたようでのんきに手を振っている。
もう忘れたのだろうか。
あの出来事以来、黒羽くんとは会わなかった。
連絡も取らなかった。
だから、彼も日本に帰ってくるなんて知らなかった。

黒羽くんは私達が来るまで、博士の家の扉を開けて待っていた。
どうやら、合鍵を使って開けたらしい。

新一「よぉ、。久しぶりだな。できればお前には会いたくなかったけど。」
黒羽「それはこっちの台詞。よっ、志保。久しぶり。春以来?」
志保「え、えぇ。そうね。」
新一「?」

言葉が詰まってしまった。これでは工藤くんが不審に思ってもおかしくない。
工藤くんは案の定、怪しい、といった顔つきで見てくる。

新一「オメェら、向こうで会ってねーのか?」

あぁ、工藤くんが疑問に思ったのはそっちのこと・・・。
よかった・・・。

快斗「あぁ、新一が来た日にたまたま会って、それ以来。
俺もマジシャンの仕事で忙しいし。大学もあるし。」
新一「お前もちゃんと向こうでやってんだな。」
快斗「まぁ、一応は。」

黒羽くんはずるい。自分だけ全てを忘れたみたいに普通に私にも工藤くんにも話しかける。

快斗「じゃぁ、俺は先に手洗ってくるから
新一と志保は博士に挨拶してきたら？」
新一「お前も先に挨拶くらいしろよ。」
快斗「俺は三日前にしたぜ？俺は志保より早く着いてんの。」

そういえば黒羽くんが持っている荷物は泊りがけにしては小さい。
というより・・・

新一「って、オメェここに泊まんのか？」
黒羽「あぁ、そうだけど。三日間ずっとここに泊まらせてもらってた。
母さんも寺井ちゃんも何があるかしらねーけどいないみてーだし？」
新一「そういや、快斗の親もお気楽主義だったよな。」
快斗「あぁ。ったく、息子が帰ってきてるってのにどこで何してんだか。
それより志保、早く行ってあげねーと。博士、志保が来るのすげー楽しみにしてたから。」

そう言うと、黒羽くんは洗面所のあるほうへと向かった。

ーーー

新一「／／／／／っ、（くそ。何言ってんだ俺）・・・やっぱいい！忘れろ。」
快斗「・・・志保は新一のことしか見てねーよ。」
新一「知ってる。」
快斗「（イラ・・・）」
新一「けど、いくら俺が探偵でも傍にいねえとわかんねえこともあるし。」
快斗「・・・」

――――――

あまり二人で同じ空間にいたくなくて急いでキッチンを出ようとしたのに
黒羽くんに呼び止められた。

快斗「まだ怒ってんの？俺がキスしたこと。」
志保「・・・」
快斗「悪かったよ。あれは冗談だから忘れろ。」
志保「！！ふざけないで！！冗談でもしていいことと悪いことがある・・・」

感情的になった私の肩に何かが触れた。
それは工藤くんの手だった。

志保「くど・・・」
新一「お前ら声でかすぎ。寝れねーよ。」

その瞬間、工藤くんの拳が黒羽くんの頬に直撃した。
そして、私の腕を掴みどこかへ連れて行こうとする。
博士の家を出て、着いたのは工藤くんの家だった。

志保「工藤くん・・・ごめんなさい。でも、あれは冗談だったって、黒羽くんも・・・」
新一「バカかお前は！！隙見せてっからだろ！！」

私に怒鳴った工藤くんの目はあの時と同じ悲しい目で、見ていられなかった。

新一「わり。分かってんだ。快斗が勝手にやったってことくらい。
お前が悪いわけじゃないことも。けど、イラついてど

ーしようもねー。
俺の知らないところで他の男がお前に触れたりキスしたり、
そういうの考えるだけでたまんね。
ガキなんだよ、俺は。」
志保「・・・・」
新一「・・・・よし、忘れる。お前ももう忘れろ。」
志保「ねぇ、工藤くん。」
私は工藤くんを自分に振り向かせ、キスをした。
その後も私は博士の家には帰らず、工藤くんと一緒にベッドに入った。
そして、私達は始めて体を重ねあった。

甘い甘いこの夜を
溢れる熱情を
月だけが見てた。

４話：２０歳夏・月の家（後書き）

なんか、砂時計の漫画を読みながら書いたので、
キャラが違うかもしれません・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3572y/

腕時計

2011年11月21日12時11分発行